〈巻頭言〉

「物足りる」図書館

図書館長・教授　村　瀬　順　子（英文学・英米文化）

夏目漱石の『三四郎』は、熊本の高等学校を卒業して東京帝国大学に入学した三四郎の淡い恋と失恋を描いた青春小説である。大学の授業が始まり、律義な三四郎は専門以外の授業も含めて週40時間以上の授業に出席するが、どうも物足りない感じがしてならない。それを聞いた友人の佐々木与次郎は、馬鹿にしたようにこう言い放つ。「下宿屋のまずい飯を一日に十返食ったら物足りる様になるか考えてみろ」と。つまり、大学の授業など、下宿屋のまずい飯と同じで、いくら食べても満足のいくようなものではないというのである。

与次郎は三四郎に電車を乗り回すこと、料理屋でご馳走を食べること、寄席を楽しむことを指南した後、こう告げる。「これから先は図書館でなくっちゃ物足りない」と。これを聞いて三四郎は図書館通いを始める。

大学の授業を下宿屋のまずい飯に例えるあたり、大学教員の立場からすれば、苦笑する他ないが、ある種の真理を衝いているところもある。それは、大学の授業も下宿屋の飯も宛行扶持（あてがいぶち：一方的に与えられるもの）では面白くないということではないだろうか。ただ単に椅子に座って授業を聞いているだけでは身につかない。自分で興味を持ち、疑問に思ったことを追求していく姿勢が大事だということだろう。

そういう意味では、豊富な資料を備えた図書館は「主体的に学ぶ」ための絶好の機会と場所を提供してくれる。授業が物足りないと感じたら、図書館は「物足り」得る場所であるに違いない。

とは言え、世紀の変わり目に２年間イギリスのロンドンに留学した漱石自身は、かの有名な大英博物館内にある図書閲覧室（大英図書館は閲覧室を残して1998年に別の場所に移転）へは行かなかったようだ。読みながら余白に書き入れをすることを習慣とした漱石は、図書館で借りるよりも自分で購入する方を選んだのだろう。留学中、衣食住を切り詰めて400冊にも上る本を買い集め、下宿に籠城して文学論の研究に没頭した。

一方、正に漱石と入れ違いで日本に帰国した南方熊楠は、８年間のロンドン滞在中、大英博物館の古美術部門で東洋関係の資料整理を手伝ったことから閲覧室の利用が認められ、毎日、朝から晩まで通いつめたと言う。生物学から民俗学に至るまで幅広い関心を持っていた熊楠は、古今東西のあらゆる書籍から「抜書」し、「ロンドン抜書」と呼ばれるノートは大判で54冊に上ったという。今のようにコピー機のない時代であったからこそ、驚異的な記憶力を持つ熊楠にとっては抜書こそが知識を身につける手段だったのだろう。

漱石と熊楠は同年の生まれで大学予備門の同級生だった。全く正反対の気質を持つ二人だが、学問への熱い思いを抱いて、それぞれのやり方で「物足りる」べく奮闘努力していた様子が伺える。こうした明治の達人たちから学ぶことは実に多い。但し、熊楠は、閲覧室で二度暴力事件を起して利用許可を取り消された。理由はともあれ、多くの人たちが利用する図書館では、まずマナーを守ることが肝要である。